

二〇二二年度 群馬大学共同教育学部 学校推薦型選抜問題
国語専攻

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 問題用紙は表紙を含め3枚、解答用紙は1枚、下書用紙は1枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。
3. 受験番号と氏名は全ての解答用紙の所定の欄に必ず記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題用紙と下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

次の上段の単語と下段の単語が、すべて結びつけられるように、上段の語の記号を下段の語の上に書き入れて下さい。

- | | | |
|-------|-----|--------|
| ① 明白な | () | () 頭脳 |
| ② 明確な | () | () 意志 |
| ③ 鮮明な | () | () 事実 |
| ④ 明晰な | () | () 視界 |

ちよつと見ると、どれでも入るようです。しかし、全部がうまく納まるように結びつけた。上の段の漢語を、和語、ヤマトコトバで言い換えると何となりますか。一つの単語すべて置き換えられます。つまり「はつきりした」一つになる。

和語なら一つですむものを、漢語だと四つに言い分ける。それだけ漢語は一語一語の意味が細かく分かれているということなのです。その表現にはこれしかないと言葉がピシッと決まる。

「白」とは誰の目にもはつきり見えて、疑いがない、隠すところがないこと。「明白な」といったら、「明白な頭脳」とはいけません。「明白な事実」です。「明晰な」というなら「頭脳」でしょう。「明晰な事実」「明晰な視界」とはいけません。「晰」とは天から来る光のようにキラキラしていること。すると、「鮮明な」と「明確な」が残る。「鮮明な視界」「鮮明な意志」、どちらも可能ですが、「鮮」とは新しい生き生きした肉のこと。「明確な視界」よりは「鮮明な視界」を採るべきでしょう。そこで、「明確な意志」となります。これを決めることができるのは、多くの読書によって、それぞれの使う場合を文脈ごと覚えていくからです。

これをヤマトコトバで言うと「はつきりした」「はつきりした」一語で、全部すみませす。ところが、文章を書くときには、「はつきりした」「はつきりした」と同じ言葉を繰り返して使うわけにいかないという美意識がはたらく。どう言い換えるか、そこで書き手がもっている語彙の広さ、深さがかわってきます。

言葉には、もともとの確にきちつと言いたいという要求があります。そういう要求に対し、「さっぱり」に対して「こざっぱり」というような形で語彙を増やしてきました。「馬鹿」に対して「大馬鹿」「人を小馬鹿にする」などといえます。しかし、そうした「程度」の小ではすまないことがあります。

紫式部は『源氏物語』の中で、他の平安朝和文には見えない言葉、「ものうらめし」「ものうらめしげ」、あるいは「なま憎し」「憎らか」などと数多くの形容語を造語して使いました。

彼女は漢文を非常に多く読んでいましたから、漢語の豊富な語彙に劣らないほどのヤマトコトバの形容語を使いたかった。そこで工夫をこらして単語をつくり、見事に使いこなしたのである。『源氏物語』だけにある形容詞がたくさんあります。当時の日本の男たちは、豊富な語彙をもつ漢文を学習して漢語が使えるようになればそれで立派だと思ひ、漢語の学習へと傾斜していました。その中で紫式部は、自分の言葉はヤマトコトバだと自覚し、それを細かく使い分けようと心を鋭くしていたのです。そこで足りないところを造語しました。

それから千年の間に日本人は漢語を使いこなし、それを巧みに取り入れて文章の中で使えるようにしました。現在はおよそ二〇〇〇〇字が使いこなせばいいとしているのですから、これを詳しく学ぶ必要があると思います。カタカナ語を使っても、「明白」と「明確」と「明晰」とに当たる区別を言い分けることは、日本語の文章の中でまずできないでしょう。ヤマトコトバは情趣的な表現の言葉は細かく発達させましたが、物事を客観的に見て細かく言い分けるには、どうしても漢語を使わなければならないようになっていくところがあります。一字一字の漢字の意味を覚え、漢語を区別して使えるようになって初めて表現がちゃんと決まることがある。だから今日でも、やはり漢字がどれだけ使えるかということが問題になります。貧弱でない言語生活をおくろうと思つたら、現代日本でも、漢字がどれだけ使えるかということが一つのポイントです。

では、漢語はどうして細かい言い分けができるのか。

日本語は「はつきりと」一つです。それに対して、漢語(中国語)は「明白」「明確」「鮮明」「明晰」と、四語ある。よく見ると、「明」という字が全部に入っている。「明」に加えて、「白」であるか、「確」であるか、「鮮」であるか、「晰」であるか。「明」との組み合わせとして、もう一つ概念が加わっている。漢語が二字の組み合わせだということは、二つの概念が一つにまとめられて一語となっていること。一語の中に二つの概念が組み合わせられている。「明」と「確」、「明」と「鮮」のように違う二つの概念でお互いに限定しあっているから、他の觀念が入ってこられない。それで意味が細かく確かになる。

そして、そうした二つの概念の複合形が日常語としても、メイハク、メイカク、センメイ、メイセキと四音節でいえるところが重要です。ヤマトコトバで二つの言葉を組み合わせると長くなる。「あざやかであきらか」では九音節です。それが「鮮明」(センメイ)では四音節で一語になる。そこに漢語の特徴があります。英語の単語を導入してみてもなかなかそれはできないでしょう。

(大野晋『日本語練習帳』、岩波新書、一九九九年 三三―三七頁、なお用字等、適宜に改めたところがある)

問 本文の内容をふまえて、日本語の文章の表現を豊かにする工夫について、具体例を提示しつつ、あなたの考えを述べなさい。(六〇〇字以内)